

教育研究創発国際研修における学術活動報告書

令和 6年 7月 29日

氏名 緒方亜文

所属 教職開発 コース

指導教員名 藤江康彦 教授

1. 研究課題 コミュニケーションとしての発達支援
2. 報告する学術活動の実施期間 令和 6年 7月 18日 ~ 令和 6年 7月 18日
3. 日本学術振興会特別研究員 (DC) の現在の採用状況 DC1 DC2 採用無し
4. 学術活動
 - 国外 国内
 - ①英語論文公表
 - ②研究科教員の研究プロジェクト参加
 - ③フィールドワーク
 - ④国際会議 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑤研究会 (研究発表 運営補助 出席のみ)
 - ⑥研究指導委託
 - ⑦留学
 - ⑧国際研修
 - ⑨国際インターンシップ
 - ⑩その他 (具体的に:)

5. 学術活動実施の概要

※上記4で選択した学術活動について具体的に記載してください。括弧内の概要を必ず記載してください。

- ① 英語論文公表
(著者、発表論文名、掲載誌名等、発表年月巻号、発表年月日等、論文内容の概要)
- ② 研究科教員の研究プロジェクト参加
(プロジェクト名、代表研究者名、自身の具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、プロジェクトの概要)
- ③ フィールドワーク
(調査先機関等、国名・都市名、具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度、調査先の概要)
- ④ 国際会議
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、学会・会議名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑤ 研究会
(研究発表・運営補助・出席のみ の別、研究会名、国名・都市名、発表題目名、発表形式(口頭・ポスター等)、発表年月日、発表内容等の概要)
- ⑥ 研究指導委託
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究、研究テーマと受入教員、受入期間(年月日)、具体的な研究活動、研究発表内容等の概要)
- ⑦ 留学
(派遣先機関、国名・都市名、受入身分及び研究科、受入期間(年月日)、具体的な履修状況、研究発表内容等の概要)
- ⑧ 国際研修
(プログラム名、派遣先機関、国・都市名、派遣期間(年月日)、プログラム概要、研究発表内容等の概要)
- ⑨ 国際インターンシップ
(プログラム名、派遣先機関、配属部署、国・都市名、派遣期間(年月日)、具体的な活動、プログラム内容等の概要)
- ⑩ その他(具体的な活動、活動期間(年月日)及び活動頻度等の概要)

学術活動区分 (①～⑩を記入)	④
<p>2024年7月18-20日に福岡のTKP Elgala Hallで開催された、International Conference on Education and Psychology に出席し、7月18日にポスター発表を行った。発表題は、「Discursive Construction of “Intimacy with Peers” for Students with ASD: a Qualitative Analysis of Semi-Structured Interviews (ASDの生徒にとっての「級友との親密さ」のディスコース的構築：半構造化インタビューの質的分析)」である。</p> <p>発表では、特別支援学級に在籍している、軽度の知的障害とASDの診断を持つ3名の中学生に対して行った、半構造化インタビューのデータを質的に分析した。特に、「級友との親密さ」についての語りが、ASD児と研究者の相互行為の中で、どのように生み出されるのかを明らかにした。その場での相互行為の性質と、社会文化的な影響の双方を考慮するため、会話分析の技術の一部を取り込んだディスコース分析を行った。</p>	

- (注) ① 年月日は西暦で記入してください。
 ② 英語論文発表については報告する学術活動において発表又は受理されたもの。
 ③ 上記に記載しきれない場合は、ページを追加しても差し支えありません。
 ④ 複数回の学術研究活動による報告の場合、適宜本ページを追加し、2つ目以降についても必要な内容を網羅してください。

6. 学術活動による成果

※報告する学術活動について、教育分野における国際的リーダー人材の育成とその研究成果を海外に発信することを目的とした教育研究開発国際研修の趣旨に照らし、その成果を具体的に記載してください。学術活動により得られた自身の研究課題につながる成果についてもわかるように記載してください。

※本欄に書ききれない場合、ページを追加しても差し支えありません。

【国際研修の趣旨に照らした成果】

本発表では「級友との親密さ」についての ASD 児の語りについての分析を行った。心理学において ASD 児は、その内的な特性ゆえに、級友への関心が無い、と語られがちである。しかし本研究では、これは ASD 児の固定的な性質ではなく、教室の社会文化的文脈と、具体的相互行為の中で生じていることを明らかにした。

ポスター発表では、教育学と心理学の双方の分野の、国内外の研究者、実践者などと議論を行うことができた。これらは、International Conference on Education and Psychology が、教育実践と心理学の架橋をテーマとして掲げている国際会議であるため、可能になったと言える。

まず教育学の研究者からは、特別支援学級に所属している 3 名の生徒の語りの分析の結果から、どのような実践的な示唆が得られるのかについての質問があった。また国外の小学校教師からは、日本の特別支援教育において、ASD 児が定型発達児とは異なる学級に在籍することが一般的なのかどうかの質問があった。これらへの応答を通して、研究の知見の実践的意義と、その制度的な文脈について考えを深めることができた。

また心理学の研究者からは、参加者である生徒たちが ASD であることに、どのような意味があるのか、という質問があった。またヨーロッパにおける研究の結果との類似点や差異についての質問があった。これらへの応答を通して、ASD について論じる上で、社会文化的な文脈を踏まえつつも、一定の通状況的な性質についての論じる必要があると考えた。

【自身の研究課題につながる成果】

私の研究は、全体として、ASD 児のコミュニケーションの障害の相互行為的な性質を明らかにするものである。本発表は、インタビュー調査を用いることで、子ども自身の語りを分析するものであった。

本発表で得られた教育学と心理学の双方の研究者からのコメントは、特定の社会文化的な文脈における現象という側面と、ASD という通状況的な性質についての議論の双方について、議論をするための素地となるものである。